

大学院委員会記載欄	
開催年月日	年 月 日
決定事項等	

学長	教務部長

2018年 2月 9日

大学院委員会議長
学長 加賀 裕郎 殿

文学研究科長 吉海 直人 ㊟

博士論文審査の件

標記の件に関し研究科委員会において以下の通り審査を行い、本学の博士の学位論文として合格と認められましたので、学位授与を願いたく申請いたします。

記

審査年月日 2018年 2月 9日

職・氏名 田中 教子

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 斎藤茂吉の万葉集評価語彙と物理学など
～ その作歌への応用 ～

審査委員 主 査 吉野 政治




副 査 吉海 直人

副 査 浅野 敏彦（大阪成蹊短期大学 名誉教授）

以 上




博士學位論文審査結果報告書

2018年 2月 6日

学位申請者	田中教子	
審査委員	主査	吉野政治 
	副査	吉海直人 
	副査	浅野敏彦 
(要旨)		
<p>本論文の中心となるのは、斎藤茂吉が柿本人麻呂の和歌を評価するにあたって用いている物理学の術語を手がかりに、「音の要素のみではなく、意味の要素をも同時に念中にもつて論じなければならぬ」とする茂吉の声調論を確立させ、実作に生かしていると指摘している第I章から第V章までの部分である。</p> <p>申請者が取り上げた物理学の術語は「屈折」「ゆらぎ」「波動」「圧搾」「省略」「融合」「顫動」である。申請者は、まず、これらの語について漢詩漢語および日本での茂吉以前の用例の意味と明治期に日本で本格化した物理学における意味との違いを押さえている。たとえば「屈折」という語は漢詩漢文などでは「折り曲げる。折れ曲がる。またその状態」をいう語であるが、物理学では「光線が密度の異なる物体に射し入る時に方向を転ずる現象」である。茂吉はその物理学における「屈折」を「あしひきの山河の瀬の響るなへに弓月が嶽に雲立ちわたる」(『萬葉集』巻7・1088)などの歌の分析に用い、さらに自らの実作に生かし、『赤光』に特徴的な上下句の分離した歌(例「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」)を数多く生みだしたとする。</p> <p>それぞれの意味を確定するのに用いられている資料は的確であり、その分析も問題はない。論の内容にはいまだ不十分な点もあるが、茂吉の声調論に新しい視点を与えたものと評価できる。申請者は歌人として活躍しており、人麻呂歌また茂吉歌の分析は緻密であることも評価できる。</p> <p>以上までの五章に加えて、本論文では「屈折」論がヨーロッパ文学の「未来派」に影響を受けた可能性についても論じている。「未来派」は明治の末に森鷗外によって日本に入り、新聞各紙をにぎわせた過激な新興芸術である。その表現方法に多数の場面を同時に描く方法があり、茂吉はこの理論と萬葉集の巻7・1087および1088の所謂「腰折歌」をつなげて、そこに新しい美を見出し、また、「未来派」の異様な美の影響を受けつつ、上下句の離れた歌の様式などの『赤光』を彩る異様な作品群を形成したとする。</p> <p>最後に論文では、茂吉の特に彼の「屈折」論に基づいて作られた歌、すなわち上下句の分離した歌が、後世にどのように影響しているかについても述べている。</p> <p>本論文は、博士(日本語日本文化)(同志社女子大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。</p>		

博士学位論文審査結果要旨

2018年 2月 6日

学位申請者	田中教子	
審査委員	主査	吉野政治 
	副査	吉海直人 
	副査	浅野敏彦 
論文題名		
斎藤茂吉の万葉集評価語彙と物理学など ～ その作歌への応用 ～		
(要旨)		
<p>近代日本の歌人、特にアララギ派の歌人は、斎藤茂吉の短歌理論、特にその声調論の影響を受けている。茂吉の声調論は、茂吉自身の言葉を引用すれば「音の要素のみではなく、意味の要素をも同時に念中にもつて論じなければならぬ」とするものであるが、アララギ派の歌人たちだけでなく、茂吉の研究者においても、茂吉の声調論を明確に捉え得てはいないようであり、その説明は漠然としており、難解なものになっている。</p> <p>田中教子氏の研究は、茂吉が『萬葉集』所収の秀歌、特に柿本人麻呂の和歌を分析するとき用いられている、物理学の術語に注目し、茂吉の声調論には物理学の影響があったとするものである。</p> <p>本論文で取り上げられている物理学の術語は「屈折」(第I章)、「ゆらぎ」(第II章)、「波動」(第III章)、「圧搾」「省略」「融合」(以上第IV章)、「顫動」(第V章)である。田中氏はそれらの語の意味が従来のものではなく、新しい意味が附与された物理学の術語であることを、漢詩漢籍などの用例と明治期の物理学書(一部幕末の蘭学書も含む)の用例との比較によって明らかにした上で、茂吉の『萬葉集』所収歌(短歌ならびに長歌)を論じる文章の中に現われるそれらの語が物理学のそれであることを押さえ、それに基づいて次のような見解を提示している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、茂吉は、それらの術語を援用することによって、萬葉歌、特に柿本人麻呂の和歌の斬新さを解き明かしたこと。 2、茂吉は、そうした萬葉歌の評価法を発見したことによって、自身の声調論を確立したこと。 3、さらに茂吉は、確立した彼の声調論を実作に生かしていること。 <p>以上のような見解が本論文でどのように説明されているかを「屈折」の場合を例にとると、あしひきの山河の瀬の響るなへに弓月が嶽に雲立ちわたる(『萬葉集』巻7・1088)という柿本人麻呂の歌は、従来は上句の聴覚的内容から下句の視覚的内容への接続が破綻している所謂「腰折れ」として低く評価されていたが、茂吉は、この歌は、分析すると上の句で「の」の音を続けて、連続的・流動的・直線的にあらはして、下の句で屈折せしめて、結句では四三調(二二三調)で止めてある。これなども誠に自然であつて、一首はそのやうな関係で動的に鋭くなつてゐるのである。</p> <p>と音の観点から説明しつつ、意味の観点から、川浪の激つ音と雨雲の動いてゐるさまとを、原因結果の関係でなしに二つを接近せしめて観入している態度</p>		

と説明し、「事態が同時に並行し進行する」その世界に自らが溶け込むことで「歌の世界が途中で大きく変わる」と説明している。

田中氏は、この茂吉の人麻呂歌評価の観点に物理学の光の「屈折」の説明が声調を評価する観点として導入されていることを指摘する。さらに田中氏はこうした声調の発見は茂吉自身の、

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の実は熟める畑に

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く散りゐたりけり

など、歌集『赤光』で特徴的な上下句で別々のことをいう実作歌に生かされているとするのである。

以上のように、田中氏は『柿本人麻呂』『萬葉秀歌』に結実する茂吉の萬葉集研究の意味を明らかにすると同時に、茂吉の実作歌とが有機的関係にあることを明らかにしている。これによって、茂吉の人麻呂歌評価の観点が再確認できるとともに、茂吉自身の歌の理解をも容易になることは確かである。田中氏は歌人でもあり、歌の微妙な表現の差異についても的確な説明がなされており、分かりやすいことも評価されてよいであろう。

田中氏の研究は、一見無関係に思われる斎藤茂吉の声調論および自作歌と近代物理学との関係を明らかにした、以上の第I章から第V章が中心となるが、続いて、上下句の内容が分離した形式をいう「屈折」論には、20世紀初頭に発した新興芸術「未来派」の理論と関わっている可能性を指摘し（第VI章）、さらに、茂吉の屈折歌が後世に与えた影響についても明らかにしている（第七章）。前者はこれまで誰にも指摘されていないことであるが、一つの試案として注目されるものであり、後者も一つの流れとして認められるであろう。




前述のように歌人でもある田中氏の説明は、具体的な一首一首の歌の分析において、統語論的な観点からだけでなく、同一単音の連続による効果などにも及ぶ詳細な説明がなされており、説得性に富む。しかし、時に直感的に説明され、客観的な説明が省かれているところも稀に見られることが惜しまれる（特に第VI章）。あわせて、本論に決定的な影響を与えるものではないが、次のような点の手薄さも惜しまれる。

1. 茂吉は物理学の術語をどのような経緯で注目するようになったのかの追究がなされていないこと。茂吉の蔵書が戦災により焼失していることから茂吉の机辺にあった物理学書が具体的に何であったかを明らかにするのは不可能であり、茂吉の文章に引用されているものからどのような研究書を読んでいたかは分かるものの、それらの書に注目するきっかけが何であったかの探索はなされてよかったものと思われる。
2. 『萬葉集』の歌の最新の理解に関する言及がやや手薄に感じられること。例えば人麻呂の歌は茂吉の理解に即して分析することが本論でなすべきことではあるものの、最新の『萬葉集』の研究ではそれがどのように分析されているかを対比させることは、茂吉の声調論がどのように形成されてきたかを客観視することになるからである。

以上を総合して、田中教子氏の『斎藤茂吉の万葉集評価語彙と物理学など ～その作歌への応用～』は斎藤茂吉の「声調論」研究に新しい視点を与えたものとして、博士号を授与するに値すると判断する。

博士学位論文内容要旨

2018年 2月 6日

学位申請者	田中教子	
審査委員	主査	吉野政治 
	副査	吉海直人 
	副査	浅野敏彦 

(要旨)

本論文は、斎藤茂吉が柿本人麻呂を中心とする『萬葉集』所載歌を理解する際に用いている「評価語」が近代物理学の術語を援用したものであることを明らかにし、その萬葉歌の評価作業の中で茂吉の「音の要素のみではなく、意味の要素をも同時に念中にもつて論じなければならぬ」とする彼の声調論を確立させ、実作に積極的に生かしたとするものである。

第I章では、茂吉の萬葉集の和歌の声調を評価する時に用いられた「屈折」という語について論じられている。「屈折」は他の文学作品や評論にたびたび使われる用語であるが、茂吉の場合はそれらとは異なり、従来評価の低かった所謂「腰折歌」の形を積極的に評価するものとして用いられている。例えば「あしひきの山河の瀬の響るなへに弓月が嶽に雲立ちわたる」(『萬葉集』巻7・1088)は上下句の分離を光線屈折の現象に譬えて評価しているとする。また茂吉はここから学んで自らの実作に生かし、『赤光』に特徴的な上下句の分離した歌(例「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」)を数多く生みだしたとする。

第II章では、茂吉の評価語「ゆらぎ」について論じられている。茂吉は、文学的表現に見られる心理的なゆれを「ゆらぎ」と言っていることもあるが、「をとめ等が袖振山の瑞籬の久しき時ゆ思ひき吾は」(『萬葉集』巻4・501)「子らが名に懸けのよろしき朝妻の片山きしに霞たなびく」(『同』巻10・1818)「さ夜中と夜は深けぬらし雁がねの聞こゆる空に月渡る見ゆ」(『同』巻9・1701))を声調の「ゆらぎ」という場合には、これらの歌が掛詞や掛詞に類似の用法により、言葉がずれながら進行するところに注目し、その動きをブラウン運動に譬えており、物理学的な意味の「ゆらぎ」で用いているとする。さらに茂吉はこの歌法を「死に近き母の添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる」という実作歌につなげたとする。

第III章では、評価語「波動」について論じられている。「波動」は伊藤左千夫以来のアララギの伝統的な評価語と言えるが、茂吉はそれとは異なり、科学的に捉えられた波の動きに譬えて用いられたものであり、特に人麻呂に代表される長歌の在り方に見られるものとする。それは西洋詩や近代詩と異なる日本詩の美を示したもので、波のような繰り返しをもって長大な序を形成し、僅かな歌意を表す様式を言い、さらにやや趣を異にする短歌にも「波動」を用いて、「ともしびの明石の大門に入らむ日や漕ぎ分かれなむ家のあたり見ず」(同巻3・254)が「入らむ」「別れなむ」に a+mu の音の連続と、その間に読点を打つほどの休止があることをもって、用いられるものである。こうした「波動」を持つ和歌は、茂吉の作歌のもっとも早い時期から終焉まで見られ、彼

のもっとも基本的かつ重要な声調であったとする。

第IV章では、評価語「圧搾」「省略」「融合」について論じられている。「圧搾」の理論は、「足柄の彼面此面に刺す絹のかなる間しづみ見ろ我紐解く」(巻14・3361)の一首全体を「圧搾」の調子と捉えるものであるが、茂吉の理論は、分析の過程で紆余曲折しており、「圧搾」は、最初「省略」に「融合」の概念を加えて複雑化しており、分かりにくいものとなっている。しかし、『萬葉秀歌』では「圧搾」を「凝縮」という本来の意味に捉えなおし、「省略」を本来の省くとして区別し、さらに美学的概念の「融合」を持ち込むことを止めたことによって、理論を完成したようであるとする。こうした「圧搾」の技法は茂吉の実作「とろとろとあかき落葉火もえしかば女の男の童あたりけるかも」ほか多く見える。しかし、そうした作は平凡であり、むしろ理論の完成に至る過程で彼が述べた「省略技法」「融合」などが、彼の実作である「猫の舌のうすらに紅きてざはりのこの悲しさを知りそめにけり」などと酷似しており、注目すべきである、とする。




第V章では、評価語「顫動」について論じられている。「顫動」は人麻呂の歌の特徴のひとつであり、直線的に上から下へ流れるような調べに、写生的内容が、哀切、喜びなどの震えるような感情を表すものを言う。茂吉は人麻呂の歌では震えるような感情がしばしば「けるかも」や「見ればさぶしも」などの語に集約されていると言い、自らの歌にも取り入れており、「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」はその到達点であるとする。

第VI章では、第I章の「屈折」に関わる、ヨーロッパ文学の「未来派」の影響が述べられている。「未来派」は明治の末に森鷗外によって日本に入り、新聞各紙をにぎわせた過激な新興芸術である。その表現方法に多数の場面を同時に描く方法があり、茂吉はこの理論と萬葉集の巻7・1087および1088の所謂「腰折歌」をつなげて、そこに新しい美を見出し、また、「未来派」の異様な美の影響を受けつつ、上下句の離れた歌の様式などの『赤光』を彩る異様な作品群を形成したとする。

第VII章では、茂吉の後代への影響が述べられている。茂吉の行った上下句の分離した歌の形は、後代の若い作者たちのそれぞれの解釈で、くりかえし行われ、吉本隆明が賞讃したことにより、一層力を得た、とする。

試問結果の要旨

2018年 2月 6日

学位申請者	田中教子	
審査委員	主査	吉野政治 
	副査	吉海直人 
	副査	浅野敏彦 

(要旨)

審査員は、2018年2月6日午前10時30分から11時30分まで、学位申請者である田中教子氏に対し、本論文に関する公開の試問を行った。はじめに主査から論文の概要についての説明があり、続いて論文の中で典型的に田中氏の論の展開法を示していると判断される「屈折」論を取り上げ、従来の意味と物理学の学術語としての意味の違い、また茂吉に先行して「屈折」の語を歌論に用いた正岡子規および伊藤左千夫のそれとの違いについての質問があった。申請者はこれに対して的確な回答をした。続いて、斎藤茂吉の「声調論」の確立と柿本人麻呂歌研究との前後関係、および西洋における新興芸術との前後関係についての質問があり、これについての申請者の回答も的確なものであった。続いて副査から茂吉が物理学の理論を研究するきっかけについての質問があり、申請者は茂吉をめぐる人間関係や当時の日本における知識人の間に知られている物理学の状況についての回答があった。それらはおおむね満足できるものであった。また、副査から明治時代の漢語についての調査方法について正当な方法によっているという指摘とともに、一部の使用テキストについての質問があった。また、もう一人の副査から物理学における「術語」と一般に用いられている語との違いについての詳しい分析に匹敵するものが文学研究における「術語」に対しても行われる必要があったのではないかという指摘などがあり、これらは今後の課題とするという回答があった。また、論文中に見られるいくつかの誤字などについての指摘があり、これらも正式に提出される論文では訂正されるべきであるという指摘があった。以上の質疑応答から、申請者は斎藤茂吉の「声調論」について新しい見方を、的確な材料を用いて提示していることが確認された。